

## 1. 課題名、調査地、氏名

課題名：「生存基盤としての宗教―世俗的イスラーム国家インドネシアにおける  
華人の宗教―」

調査地：インドネシア

氏名： 北村 由美

## 2. 研究目的

宗教は、我々の生活の根幹に関わる社会的生存基盤のひとつである。本研究は、国民の約90パーセントがモスリムであり、国家政策の場においてもイスラームの影響が多であるインドネシアにおいて、イスラーム以外の宗教、すなわちキリスト教、仏教、儒教を信仰する華人に焦点をあてることにより、宗教、国家、エスニシティの関係を明らかにすることを目的としている。

## 3. 研究の内容と成果

申請者はこれまで、2006年にインドネシア政府によって再び公認宗教化された儒教を中心に、政治的運動としての華人の宗教活動についての調査を進めてきた。本研究では、これまで行ってきたインドネシアの儒教に関するフォローアップ調査としてインタビュー調査を中心に行うと同時に、他の宗教に関する基本文献の収集を行った。特に、Center for Strategic and International Studies 所蔵の膨大な新聞クリッピング資料の中から、1990年代以降のカトリック、プロテスタントの各団体の動向や、イスラーム政党の動向などを中心に、複写による資料収集を行った。

## 4. 成果発表の具体的な予定

本研究の成果は、これまでの調査結果と総合し、“Negotiation Succeeded: Re-recognition of Confucianism as a "Religion"というタイトルで執筆し、2008年7月4日、5日に東南アジア研究所で行われた東南アジアの華人に関する国際セミナー、CSEAS-Netherlands Institute for War Documentation Joint International Workshop on “Chinese Identities and Inter-Ethnic Coexistence and Cooperation in Southeast Asia”にて発表を行った。セミナーの成果として、発表者の論文集の出版が予定されている。



インドネシアの儒教が宗教として組織化の拠点であった Solo の礼堂内。



スラバヤの中国寺院内。老子、仏陀、孔子が同列で祀られている。